

# 語学教育における簡略化ポートフォリオ開発への試みに 関する基礎的研究

北 條 礼 子\*・松 崎 邦 守\*\*

(平成16年4月30日受付；平成16年7月9日受理)

## 要 旨

本論は、将来的には小学校をも射程に入れたうえで、EFL 学習環境における教授ツールとしてのポートフォリオを活用する学習のカリキュラム開発を目指している。これまで先行研究により、ポートフォリオの最大の弱点として、学習者、教師のどちらにとっても多大な労力と時間がかかることが指摘されている。しかし、ポートフォリオが広く活用されるためには、労力と時間両面の簡略化が必要であると考えられる。そこで、その準備段階として、本稿は公立小学校現職教員のポートフォリオをどのように捉えているかについての意識を明らかにすることを目的としている。2002年12月に C 県現職小学校教員初任者研修経験者152名、同現職小学校教員5年目研修経験者30名、同現職小学校教員11年目研修経験者93名の計275名を対象にアンケートを実施した。対象者全275名のうち、ポートフォリオということばを聞いたことのある教員計159名のポートフォリオに対する意識を検討した。その結果、対象者はポートフォリオの特徴、構成要素などについての知識が十分であるとはいえないものの、ポートフォリオが総合的な学習ばかりでなく、教科においても有効な手法であると捉えていることが明らかになった。

## KEY WORDS

ポートフォリオ portfolio

簡略化ポートフォリオ simplified portfolios

教授ツール instructional tool

カリキュラム開発 curriculum development

## 1. 研究の背景

ポートフォリオとはもともと「書類を綴じ込むための紙ばさみ」を意味し、ポートフォリオの活用は、「有価証券」や「絵画の傑作品」の集積を目的とした経済界や芸術世界において先行していた。教育分野において、ポートフォリオは1980年頃から欧米において学習や評価に適応されるようになった。その理由として、ポートフォリオを作成することをおして学習の過程を学習成果と関連づけて記録することが可能であるため、構成主義の学習観に基づく教育に関心のある授業実践者や研究者がポートフォリオに関心を寄せるようになったことがあげられる(余田, 2001)。

近年、ポートフォリオは国内では総合的な学習の評価手段として注目されているが、ポートフォリオが総合的な学習に限定されるものではなく、各教科においても有効な教授ツールある

---

\* 学習臨床講座

\*\* 千葉県沼南町立高柳中学校

いは評価ツールであると述べられている(村川, 2001; 西岡, 2003)。

国内における教授ツールとしてのポートフォリオに関する実証的研究は多いとはいえないが、中でも外国語としての英語教育におけるポートフォリオの実践研究例は大変数が少ない。これまでのところ、英語教育においては、峯石(2001)による調査と松崎(2003)による実証的研究がある。峯石は自身の調査について、日本の大学レベルにおけるポートフォリオに関する初めての調査であると述べている。峯石(2001)は教授内容として学習方略のうち読解方略、ライティング方略を取り入れ、ポートフォリオを組み込んだ2回の調査を行い、ポートフォリオが教授ツールとして有効だったと結果づけている。また、松崎(2003)は、ポートフォリオを活用した学習に新たにカンファレンスを導入し、看護学生を対象とした研究において、ポートフォリオを用いた英語のライティング学習が学生の学習への動機づけの向上に有効であったことを報告している。

ところで、ポートフォリオを有効に活用するためには、いくつかの必要不可欠な構成要素があることが先行研究において指摘されている。例えば、ポートフォリオの目的を明確にすることやガイドラインを事前に学習者に提示すること(Linn 他, 2000)、教師と学習者が対話や話し合いをしながら、ポートフォリオ作成をとおして学習したことを振り返るためにカンファレンスを実施すること(Genesee 他, 1996)、ゴールカードに学習の目標と授業の振り返りを記述すること(Smolensky 他, 1995)、などである。

さて、以上で既に述べたように、ポートフォリオは教授ツールおよび評価ツールとして有効であるが同時にその実践を困難にする弱点も指摘されている。Linn 他(2000)はポートフォリオの弱点として以下に示す4点をあげている。具体的には、①学習者にとって時間や労力がかかること、②教師にとっても時間や労力がかかること、③評定の信頼性が比較的低い傾向にあること、④ポートフォリオは容易に作成できるという安易な認識を持たれてしまう傾向があること、という指摘である。

ところで昨今、公立小学校における英語の教科化の可能性が話題になっているが、筆者らは将来的に公立小学校に英語が教科として導入された場合、ポートフォリオが教授ツールとしてばかりでなく評価手段としても有効な手段になりうるのではないかと考えている。しかし、ポートフォリオの実施には、学習者ばかりでなく教師にとっても大変な時間や労力がかかることから、簡略化を図れば、その実施が容易になるものと予想される。ポートフォリオの簡略化を想定し、その目的達成の基礎資料として、現段階から公立小学校教員がポートフォリオに対する意識を明らかにしておくことには十分意義があると考えている。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、教授ツールとしてのポートフォリオを簡略化する第一段階として、公立小学校教員のポートフォリオに対する認識を明らかにすることである。本研究の第二の目的は、教職経験の年数の違いによりポートフォリオに対する認識に違いがあるかどうかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

- 3.1 対象者： ① C 県現職小学校教員初任者研修経験者152名  
② C 県現職小学校教員 5 年目研修経験者30名  
③ C 県現職小学校教員11年目研修経験者93名
- 3.2 測定具： ①ポートフォリオという言葉聞いたことがあるかどうかに関する 1 項目(2 者択一形式)、ポートフォリオの効用、弱点に関する10項目( 5 段階尺度形式)の計11項目から成るアンケート  
②③ポートフォリオという言葉聞いたことがあるかどうかに関する 1 項目( 2 者択一形式)、ポートフォリオの効用、弱点に関する19項目 ( 5 段階尺度形式) の計20項目から成るアンケート  
調査①②③とも、「ポートフォリオという言葉聞いたことがある」と回答した者のみが、それ以降の項目の回答に進む形式である。さらに、調査②③は調査①の後に実施したため、調査①のアンケート項目に 9 項目をつけ加えて調査を実施した。）
- 3.3 実施時期 ①は2002年12月初旬、②・③は12月下旬
- 3.4 手続き： 集団調査で約15分間で実施した。
- 3.5 分析方法  $\chi^2$ 検定、分散分析

4. 研究の結果と考察

4.1 ポートフォリオという言葉について

「ポートフォリオという言葉聞いたことがあるかどうか」に関する項目について、肯定・否定の頻度数を算出し、その上で  $\chi^2$  検定を行ったが、その結果は表 1 に示すとおりである。

表 1：ポートフォリオという言葉聞いたことがあるかどうかに関する項目の頻度数・ $\chi^2$ 検定結果（N=275）

項目	項目内容				$\chi^2$ 検定結果	
			肯定	否定	$\chi^2(1)$	p
1	ポートフォリオという言葉聞いたことがありますか	初任	87	65	3.18	+
		5 年	17	13	0.53	ns
		11年	55	38	3.10	+

$$+.05 < p < .01$$

表 1 をみると、C 県現職小学校教員初任者研修経験者のうち、ポートフォリオという言葉聞いたことがある教員が152名中87名、聞いたことがない教員が65名であった。 $\chi^2$  検定の結果、 $\chi^2(1)$  は3.18であり、ポートフォリオという言葉聞いたことのある教員の方が数が有意に多い傾向であった。

次に、同 5 年目研修経験者のうち、ポートフォリオという言葉聞いたことがある教員が30

名中17名、聞いたことがない教員が13名であった。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)$ は0.53であり、聞いたことがある教員とない教員の人数に有意な差は認められなかった。

最後に、同11年目研修経験者93名のうち、ポートフォリオという言葉聞いたことがある教員が93名中55名、聞いたことがない教員が38名であった。 $\chi^2$ 検定の結果、 $\chi^2(1)$ は3.10であり、ポートフォリオという言葉聞いたことのある教員の方が数が有意に多い傾向を示した。

また、初任者研修経験者、5年目研修経験者、11年目研修経験者を直接比較すると、 $\chi^2(2)$ は0.26であり、有意差はなく、ポートフォリオということばを聞いたことがあるかどうかについて、教員経験年数による差はないことが明らかになった。

以上の結果から、少なくとも教職経験が11年以下の教員はポートフォリオということばについては、聞いたことがある傾向があることがわかった。「総合的な学習の時間」においてポートフォリオが用いられていることが多いからであろうと推察される。

4.2 ポートフォリオの効用・弱点について

4.2.1 初任者研修経験者

4.2.1.1 平均・標準偏差

まず、初任者研修経験者87名のポートフォリオの効用・弱点に関する10項目について、平均、標準偏差を求めたが、その結果は表2に示すとおりである。

表2：ポートフォリオの効用・弱点に関する10項目の平均、標準偏差  
(初任者教員研修経験者：N=87)

項目	項 目 内 容	平均	SD
1	Pの活用により学習者はねらいにそって自分の学びを容易に収集できる	3.80	0.73
2	Pの作成により学習者は自分の学習に対して振り返る力を高められる	4.18	0.69
3	Pの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れる	4.15	0.80
4	Pの作成・活用は教師にとって手間がかかることである	3.64	1.09
5	Pの作成により教師及び学習者自身は学びを真正に評価できる	3.85	0.90
6	Pの作成により教師は必要な場面で適切な支援を与えやすくなる	3.93	0.82
7	P作成により学習者は教師や仲間と容易にコミュニケーションできる	3.67	0.82
8	Pは総合的な学習においてより有効性を発揮する	4.10	0.82
9	教科学習においてもPの有効性を活用できる	4.03	0.83
10	Pをもっと手軽に活用できる手法があるとよい	4.31	0.83

(注) P：ポートフォリオ、G：ガイドライン

表2をみると、まず項目2、3、8、9、10の計5項目が平均値4.0を越えていた。平均値が4.0を越えている項目については回答者が高い評価を与えている内容と判断した。この5項目の項目内容をみると、項目2、項目3はポートフォリオの作成により学習者は自分の学習を振り返る力を高めることができ、教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れるというものである。項目8、項目9はポートフォリオが総合的な学習ばかりでなく教科学習においても有効に活用できるというものであった。最後に項目10はポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法への希望であり平均が最も高かった。

その他の5項目をみると、最も低い平均値でも3.63を示していた。この5項目の項目内容をみると、ポートフォリオの作成により、学習者はねらいにそって自分の学びを容易に収集でき(項目1)、教師及び学習者自身は学びを真正に評価でき(項目5)、教師は必要な場面で適切な支援を与えやすくなり(項目6)、学習者は教師や仲間と容易にコミュニケーションできる(項目7)が、ポートフォリオの作成・活用は教師にとって手間がかかることであることについて、対象者がどちらかという肯定的に捉えられていることがわかった。

#### 4.2.1.2 分散分析結果

初任者研修経験者87名の回答した10項目間に差があるかどうかを検討するため分散分析を行った結果、F値は11.20であり、1%レベルで有意であった。そこで、LSD法による多重比較を行った(MSe=0.39, 5%水準)。

この多重比較の結果に基づき、以下のことが、初任者研修経験者の注目すべき特徴としてあげられよう。

- ①ポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法があるとよい(項目10)、という期待をしているが、ポートフォリオの作成・活用には教師の手間がかかる(項目4)とは強く意識していない(項目10>項目4)。
- ②ポートフォリオは総合的な学習、教科のどちらにも有効であると考えている(項目8≒項目9)

ポートフォリオは、その第一の弱点として教師、学習者の両者にとって作成・活用の手間が大変なことが指摘されているが(Linn 他, 2000)、初任者研修経験者はこの手間を強く意識していないことから、実際にポートフォリオを作成・活用した経験が少ないものと推察される。また、ポートフォリオを生かす教育分野については、平均も併せて考慮に入れると、総合的な学習、教科の両方にとって、有効であると考えていることがわかった。

### 4.2.2 5年目研修経験者

#### 4.2.2.1 平均・標準偏差

次に、5年目研修経験者17名のポートフォリオの効用・弱点に関する19項目について、平均、標準偏差を求めたが、その結果は表2に示すとおりである。

表3をみると、まず項目1, 2, 3, 8, 10の計5項目が平均値4.0を越えていた。平均値が4.0を越えている項目については回答者が高い評価を与えている内容と判断した。この5項目の項目内容をみると、項目1、項目2、項目3はポートフォリオの作成により学習者はねらいにそって自分の学びを容易に収集でき、また学習を振り返る力を高めることができ、教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れるというものである。項目8はポートフォリオが総合的な学習に有効であるという内容である。最後に項目10はポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法への希望であり、初任者研修経験者の結果同様最も高い平均となっていた。

また、平均が3.50以下の項目が3項目みられた。そのうち平均が2点台の低い項目が2項目あり、項目13「ポートフォリオは学習ファイルとは明確に異なるものである」と項目14「ガイドラインには、ループバックが明示されるべきである」というものである。その他には平均が3.35を示した項目12「ポートフォリオの実践にはカンファレンスが不可欠である」があった。

その他の12項目は平均が3.53から3.94を示し、概ね肯定的な回答であった。

表 3：ポートフォリオの効用・弱点に関する19項目の平均、標準偏差  
(5年目研修経験者：N=17)

項目	項 目 内 容	平均	SD
1	Pの活用により学習者はねらいにそって自分の学びを容易に収集できる	4.18	0.53
2	Pの作成により学習者は自分の学習に対して振り返る力を高められる	4.06	0.43
3	Pの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れる	4.00	0.50
4	Pの作成・活用は教師にとって手間がかかることである	3.65	1.11
5	Pの作成により教師及び学習者自身は学びを真正に評価できる	3.59	0.62
6	Pの作成により教師は必要な場面で適切な支援を与えやすくなる	3.94	0.43
7	P作成により学習者は教師や仲間と容易にコミュニケーションできる	3.53	0.62
8	Pは総合的な学習においてより有効性を発揮する	4.18	0.39
9	教科学習においてもPの有効性を活用できる	3.76	0.44
10	Pをもっと手軽に活用できる手法があるとよい	4.29	0.59
11	Pのガイドライン(G)は学習者に明示されるべきである	3.71	0.59
12	Pの実践にはカンファレンスが不可欠である	3.35	0.61
13	Pは学習ファイルとは明確に異なるものである	2.88	0.70
14	Gにはループリックが明示されるべきである	2.94	0.66
15	Gには学習目標が明示されるべきである	3.59	0.51
16	Gには学習計画が明示されるべきである	3.59	0.62
17	Gの作成では学習者の希望や考えをできる限り反映させる必要がある	3.59	0.62
18	Gの作成ではアンケートなどにより学習者のニーズを探る必要がある	3.82	0.73
19	Pの作成により学習者の自律的学習力を高めることができる	3.88	0.49

(注) P：ポートフォリオ，G：ガイドライン

4.2.2.2 分散分析結果

5年目研修経験者17名の回答した19項目間に差があるかどうかを検討するため分散分析を行った結果、1%レベルで有意であった( $F(18,288)=7.59$ )。そこで、LSD法による多重比較を行った( $MSe=0.33$ , 5%水準)。

この多重比較の結果に基づき、5年目研修経験者の注目すべき特徴として以下のことが指摘される。

- ①ガイドラインには、ループリックが明示されるべきである(項目14)、ポートフォリオは学習ファイルとは明確に異なるものである(項目13)の2項目が他の17項目の平均より有意に低かった。
- ②ポートフォリオは総合的な学習、教科のどちらにも有効であると考えている(項目8≡項目9)

Linn 他 (2000) は、ポートフォリオの弱点を克服する手段として、学習者への明確なガイドラインの提示を提唱している。そして、ガイドラインの中には、ループリック(評価基準)が明示されていることが必要であることも述べられている。しかし、以上の結果をみると、5年目研修経験者はガイドライン、ループリックをはっきりと理解していない可能性がある。さらに、ポートフォリオと学習ファイルの違いを理解していない傾向がみられたが、このことは、ポートフォリオは容易に作成できるという安易な認識を持たれてしまう傾向があるという

Linn 他 (2000) の指摘するポートフォリオの弱点を裏付ける結果であると思われる。しかしその一方、ポートフォリオを生かす教育分野については、平均も併せて考慮に入れると、総合的な学習、教科の両方にとって、有効であると考えている傾向もみて取れる。

#### 4.2.3 11年目研修経験者

##### 4.2.3.1 平均・標準偏差

11年目研修経験者55名のポートフォリオの効用・弱点に関する19項目について、平均、標準偏差を求めたが、その結果は表4に示すとおりである。

表4：ポートフォリオの効用・弱点に関する19項目の平均、標準偏差  
(11年目研修経験者：N=55)

項目	項目内容	平均	SD
1	Pの活用により学習者はねらいにそって自分の学びを容易に収集できる	3.69	0.66
2	Pの作成により学習者は自分の学習に対して振り返る力を高められる	4.04	0.64
3	Pの作成により教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れる	4.04	0.58
4	Pの作成・活用は教師にとって手間がかかることである	3.44	1.13
5	Pの作成により教師及び学習者自身は学びを真正に評価できる	3.67	0.58
6	Pの作成により教師は必要な場面で適切な支援を与えやすくなる	3.98	0.49
7	P作成により学習者は教師や仲間と容易にコミュニケーションできる	3.53	0.77
8	Pは総合的な学習においてより有効性を発揮する	3.89	0.71
9	教科学習においてもPの有効性を活用できる	3.89	0.69
10	Pをもっと手軽に活用できる手法があるとよい	4.18	0.75
11	Pのガイドライン(G)は学習者に明示されるべきである	3.76	0.69
12	Pの実践にはカンファレンスが不可欠である	3.51	0.63
13	Pは学習ファイルとは明確に異なるものである	3.13	0.82
14	Gにはルーブリックが明示されるべきである	3.25	0.58
15	Gには学習目標が明示されるべきである	3.64	0.73
16	Gには学習計画が明示されるべきである	3.64	0.75
17	Gの作成では学習者の希望や考えをできる限り反映させる必要がある	3.89	0.66
18	Gの作成ではアンケートなどにより学習者のニーズを探る必要がある	4.00	0.69
19	Pの作成により学習者の自律的学習力を高めることができる	3.76	0.74

(注) P：ポートフォリオ、G：ガイドライン

表4をみると、まず項目2, 3, 10, 18の計4項目が平均値4.0を越えていた。平均値が4.0を越えている項目については回答者が高い評価を与えている内容と判断した。この4項目の項目内容をみると、項目2, 項目3はポートフォリオの作成により、ポートフォリオの作成をとおして学習者は自分の学習を振り返る力を高めることができ、教師は学習者の学びの過程をしっかりと見取れるというものである。項目10はポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法への希望を示すものであり、初任者研修経験者、5年目研修経験者同様最も平均が高かった。最後に項目18はガイドラインの作成にあたり、アンケートなどにより学習者のニーズを探る必要性である。

また、平均が3.50以下を示した項目が3項目あった。平均の低い項目からみていくと、項目13「ポートフォリオは学習ファイルとは明確に異なるものである」の平均が3.13であり、項目14「ガイドラインには、ルーブリックが明示されるべきである」の平均が3.25であり、項目4「ポートフォリオを作成し活用することは、教師にとって手間がかかることである」の平均が3.44であった。

その他の12項目の平均は3.53から3.98を推移しており、概して肯定的な反応であった。

#### 4.2.3.2 分散分析結果

11年目研修経験者55名の回答した19項目間に差があるかどうかを検討するため分散分析を行った結果、有意差はなかった ( $F(18, 972) = 0.88$ )。この結果から、少なくとも以下のことが11年目研修経験者の特徴としてあげられよう。

①ポートフォリオは総合的な学習、教科のどちらにも有効であると考えている（項目8＝項目9）

ポートフォリオを生かす教育分野については、平均も併せて考慮に入れると、総合的な学習、教科の両方にとって、有効であると考えている傾向が見て取れる。この傾向は初任者研修経験者、5年目研修経験者、11年目研修経験者ともに共通であった。このことから、教職経験年数にかかわらず、ポートフォリオは総合的な学習の時間ばかりでなく教科にとっても有効な手段であると捉えられていることが推察される。

#### 4.2.2 群間の分散分析結果

##### 4.2.2.1 初任者研修経験者・5年目研修経験者・11年目研修経験者3群の分散分析結果

初任者研修経験者87名、5年目研修経験者17名、11年目研修経験者55名とも、ポートフォリオの効用・弱点に関する10項目に回答しているので、各項目について、この3群の平均、標準偏差を基に分散分析を行った。その結果は表5に示すとおりである。

表5をみると、項目1の「ポートフォリオの手法を用いることにより、学習者は、ねらいにそって自分の学びを容易に収集することができる」のF値が3.23であり、有意傾向を示していた。ここから5年目研修経験者が初任者研修経験者および11年目研修経験者より、項目1の項目内容を肯定的に捉えている傾向がみられることがわかった。

##### 4.2.2.2 5年目研修経験者・11年目研修経験者2群の分散分析結果

次に、項目11から項目19までは、5年目研修経験者と11年目研修経験者のみからの回答が得られたので、この2群について項目11から項目19までの各項目について分散分析を行った。その結果は表6に示すとおりである。表6から、項目14「ガイドラインには、ルーブリックが明示されるべきである」、項目17「ガイドラインの作成にあたっては、学習に対する学習者の希望や考えをできる限り反映させる必要がある」が有意傾向を示した（項目14： $F(1, 70) = 3.52$ ,  $.05 < p < .10$ ；項目17： $F(1, 70) = 2.83$ ,  $.05 < p < .10$ ）ことがわかる。つまり、両項目とも11年目研修経験者の方が上記の両項目内容をより肯定的に捉えている傾向がみられた。

#### 4.2.3 まとめ

以上の結果から、本研究の対象者となった公立小学校教員がポートフォリオに対してどのような意識を抱いているかをまとめると、以下のとおりである。

①初任者研修経験者は、ポートフォリオの作成・活用には教師の手間がかかるとは考えてい



表5：ポートフォリオの効用・弱点に関する10項目の平均、標準偏差、分散分析結果  
(初任者教員87名・5年目教員17名・11年目教員55名)

項目	項目内容	初任者		5年目		11年目		分散分析結果 F(2,156) p	初, 5, 11の比較
		平均	SD	平均	SD	平均	SD		
1	P活用・学びの容易収集	3.80	0.73	4.18	0.53	3.69	0.66	3.23 *	5 > 初 5 > 11*
2	P作成・振り返る力向上	4.18	0.69	4.06	0.43	4.04	0.64	0.95 ns	
3	P作成・学び過程見取り	4.15	0.80	4.00	0.50	4.04	0.58	0.61 ns	
4	P作成・活用教師の手間	3.64	1.09	3.65	1.11	3.44	1.13	0.63 ns	
5	P作成・学びの真正評価	3.85	0.90	3.59	0.62	3.67	0.58	1.37 ns	
6	P作成・教師の適切支援	3.93	0.82	3.94	0.43	3.98	0.49	0.09 ns	
7	P作成・コミュニケーション	3.67	0.82	3.53	0.62	3.53	0.77	0.62 ns	
8	P・総合的な学習に有効	4.10	0.82	4.18	0.39	3.89	0.71	1.68 ns	
9	P・教科学習で有効活用	4.03	0.83	3.76	0.44	3.89	0.69	1.24 ns	
10	Pの手軽な活用手法希望	4.31	0.83	4.29	0.59	4.18	0.75	0.47 ns	

(注) P：ポートフォリオ，G：ガイドライン \*：MSe= 0.47 \*p&lt;.05

表6：ポートフォリオの効用・弱点に関する19項目の平均、標準偏差、分散分析結果  
(5年目研修経験者17名対11年目研修経験者55名)

項目	項目内容	5年目		11年目		分散分析結果 F(1,70) p		比較	
		平均	SD	平均	SD			5	11
11	PのGを明示する必要性	3.71	0.59	3.76	0.69	0.10	ns		
12	Pにカンファレンス不可欠	3.35	0.61	3.51	0.63	0.80	ns		
13	Pと学習ファイルは異なる	2.88	0.70	3.13	0.82	1.24	ns		
14	Gにループリックの明示	2.94	0.66	3.25	0.58	3.52	+	<	
15	Gに学習目標の明示	3.59	0.51	3.64	0.73	0.06	ns		
16	Gに学習計画の明示	3.59	0.62	3.64	0.75	0.06	ns		
17	G作成・学習者希望反映	3.59	0.62	3.89	0.66	2.83	+	<	
18	G作成・学習者ニーズ	3.82	0.73	4.00	0.69	0.82	ns		
19	P作成・自律的学習力の向	3.88	0.49	3.76	0.74	0.38	ns		

(注) P：ポートフォリオ，G：ガイドライン +.05&lt;p&lt;.10 \*p&lt;.05

ないが、ポートフォリオをもっと手軽に活用できる手法があるとよい、と感じている。

②5年目研修経験者はガイドラインにはループリックが明示されるべきであることと、ポートフォリオは学習ファイルとは明確に異なるものであることについて意識が低かった。このことから、ガイドライン、ループリックの概念をはっきりと理解していない可能性がある。さらに、ポートフォリオをふつうの学習ファイルと区別するポートフォリオの特徴についても理解が十分でないと推察される。

③11年目研修経験者は、初任者研修経験者、5年目研修経験者より、ポートフォリオについて学習者の希望を反映させている必要性を強く感じている傾向がみられた。

④ポートフォリオを生かす教育分野については、初任者研修経験者、5年目研修経験者、11年目研修経験者とも、総合的な学習ばかりでなく教科の両方にとって、有効な手法である

と捉えている傾向がみられた。

- ⑤ポートフォリオのより手軽な活用手法への希望は、教職経験年数にかかわらず、共通して、強い希望であることがわかった。

以上から、教職経験年数にかかわらず、本研究の対象者である公立小学校教員はポートフォリオをポートフォリオたらしめる特徴や構成要素について十分な理解がなされているとは言えない状態にあるものの、少なくともポートフォリオが総合的な学習の時間ばかりでなく教科にとっても有効な手段であると捉えており、かつより手軽な活用方法を強く希望していることが推察される。このことから、ポートフォリオを学習に活用していくためには、ポートフォリオに関する基礎的知識の啓蒙とともに、簡略化を図っていくことが重要であると考えられる。

### 引用・参考文献

- Benson, P., and P. Voller. 1997. *Autonomy & independence in language learning*. Longman.
- Delett, J. S., S. Barnhardt, and J. A. Kevorkian, 2001. A framework for portfolio assessment in the foreign language classroom. *FOREIGN LANGUAGE ANNALS*. 34, 6, 559-568.
- Genesee, F., and J. A. Upshur. 1996. Portfolio and conference. In *Classroom-based evaluation in second language education* (98-117). Cambridge University Press.
- Klenowski, V. 2002. *Developing portfolios for learning and assessment*. Routledge Falmer.
- LeMahieu, P. G., D. H. Gitomer, and J. T. Eresh. 1995. Portfolios in large-scale assessment: Difficult but not impossible. *Educational measurement: Issues and practice*, Fall, 11-28.
- Linn, R. L., and N. E. Gronlund. 2000. *Measurement and assessment in teaching* (Eighth ed.). Prentice-Hall.
- Matsuzaki, K. 松崎邦守. 2003. *A study of curriculum development of EFL writing using portfolios as an instructional tool*. 上越教育大学修士論文
- Mineishi, M. 峯石 緑. 2001. 「大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究」 広島大学大学院博士論文
- Murakawa, M. 村川雅弘. 2001. 「『生きる力』を育むポートフォリオ評価」 ぎょうせい.
- Nishioka, K. 西岡加名恵. 2003. 「教科と総合に活かすポートフォリオ評価法～新たな評価基準の創出に向けて～」 図書文化.
- Oda, K. 小田勝巳. 1999. 「総合的な学習に適したポートフォリオ学習と評価」 学事出版.
- \_\_\_\_\_. 2000. 「子どもの成長を促すポートフォリオがよくわかる本」 学事出版.
- \_\_\_\_\_. 2001. 「総合的な学習に活かすポートフォリオで学力形成」 学事出版.
- Paulson, F. L., P. R. Paulson, and C. A. Meyer. 1991. What makes a portfolio a portfolio? *Educational Leadership*, 48, February, 60-63.
- Pemberton, R., E. S. L. Li, W. W. F. Or, and H. D. Person (eds.) 1996. *Taking control: Autonomy in language learning*. Hong Kong University Press.
- Slavin, R. E. 2002. *Educational psychology: theory and practice* (7th ed.). Allyn and Bacon.
- Smolen, L. et al. (1995). Developing student self-assessment strategies. *TESOL JOURNAL*, Autumn, 22-27.

Yoden. Y. 余田義彦（編）. 2001. 「生きる力を育てるデジタルポートフォリオ学習と評価」 高陵社書店.

## A Fundamental Study for Developing Simplified Portfolios Used in EFL Environments

HOJO Reiko\*, MATSUZAKI Kunimori\*\*

### ABSTRACT

The final goal of this study is to develop curriculum using portfolios in English as a Foreign Language environments, including elementary schools in the near future. In this study, questionnaires concerning portfolios were administered to 275 elementary school teachers who attended three seminars given by the prefectural educational professional training center of Chiba in December, 2002. The seminars were classified according to teachers' teaching experiences, such as one year, five years or ten years. The results revealed that: 1) Elementary school teachers evaluated portfolios to be effective for both integrated studies and teaching other various subjects; but 2) Elementary school teachers did not seem to have enough knowledge about crucial characteristics which can make portfolios successful. In conclusion, portfolios would seem to be more effective if they could be simplified for elementary school teachers.

---

\* Division of Learning Support

\*\* Takayanagi Junior High School, Chiba